

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19320089
 研究課題名（和文） 「アジアの英語教科書コーパスの構築と相互比較：社会・文化的コンテキストと関連させて」
 研究課題名（英文） Compilation of the Asian English Textbook Corpus and Comparative Study Based on It: From the Viewpoint of Social and Cultural Contexts
 研究代表者
 中村 純作（NAKAMURA JUNSAKU）
 立命館大学・言語教育情報研究科・教授
 研究者番号：20035695

研究成果の概要（和文）：

我が国中等教育の英語教科書のモニターコーパスを更新、補充、新たにアジア諸国の英語教科書を追加したコーパスを構築し、教科書研究のための環境づくりを行った上、教科書の内容（語彙、構文、文法項目、トピック、社会文化的要素等）を中心に質的・量的比較を行い日本の英語教育に欠けている点を指摘した。

また、我が国を含めたアジア諸国の英語教育の実態と課題を検討し、我が国英語教育の問題点、今後の方向性などを考えるための国際シンポジウム、英語教育での新しい試みに関する知見を共有するための英語教育公開講演会、ワークショップなども開催、これらをまとめた報告書を出版した。

研究成果の概要（英文）：

The monitor corpus of the Japanese English textbooks created so far was updated and expanded and the English textbooks used in the Asian countries were added to examine quantitatively and qualitatively what was lacking in the Japanese system, especially with regard to vocabulary, structures, grammatical items, topics, and socio-cultural factors.

The international symposia and a series of public lectures and workshops were also held to find the future direction of the English education in Japan by examining the current state of English education in Japan and Asian countries and the problems they face, sharing the new findings in the field of English teaching and English studies together with the methodologies of dealing with the corpus data. A report covering them was published in the final stage.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2009年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
年度			
総計	9,100,000	2,730,000	11,830,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育学，コーパス，言語学，検定教科書，アジアの英語教育，英語，文化

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本人の英語力に関し、様々な国際比較データがあるが、TOEFL、TOEIC 等のテストによる国際比較は、その比較方法において妥当性が疑問視されているものの、常に日本が良い評価を得ていない点に関しては共通している。その日本人の英語力の低さは、端的には日本における英語教育の中心をなす、中等教育での英語教育に原因の一旦があるという認識の下に、試行錯誤的に様々な改革が英語教育で行われてきたが、国際的な水準に照らし合わせて、使われる教材に関して、質的、量的な視点から系統的な検討が行われてきたとは言いがたい。

(2) 本研究のメンバーは研究開始以前の2年半にわたり日本の英語教育改善のために英語教科書のモニターコーパスを作成するとともに、英語教育、英語コーパス言語学等に関連した最新の知見を共有するための講演会、シンポジウムなどを実施してきたが、本研究はこの延長として位置づけられるものである。

2. 研究の目的

(1) 上記日本の英語教科書モニターコーパスの更新と補充に加え、新たにアジア諸国の英語教科書コーパスを構築し、教科書に見られる各国の英語教育の事情の違いを検討するとともに、我が国の英語教育に対する提言を行うことを目的とした。

(2) 教科書の研究に加えて、アジア諸国の英語教育の実態と彼らが現在直面している課題を検討することにより我が国の英語教育の問題点、今後の方向性などを考えるためアジア諸国の著名な研究者を招聘した国際シンポジウムや、我が国の英語教育での新しい試みに関する知見を共有するための英語教育公開講演会、ワークショップなどの開催。

(3) 研究成果をまとめた報告書の公刊。

3. 研究の方法

(1) 本研究のメンバーが研究開始前に編纂してきた我が国中等教育の英語教材を最新版として維持・管理するモニターコーパスの更新と補充に加え、新たにアジア諸国の英語教科書を加えたコーパスを構築する。入手した英語教科書のPDF化、テキスト化、該当ページのテキストとPDFをリンクしたデータベースを構築し、本研究のサーバー上に置き、Web上で公開、教科書研究のための環境づくりを行う。

(2) 日本の外国語学習指導要領に基づいて編纂された我が国の教科書とアジア諸国の教科書を比較することにより、早期英語教育の有無によって中等教育の教科書ではどのような内容的差異が現れるのか、また日本の教科書に欠けている部分について、特に教科書の内容（語彙、構文、文法項目、トピック、社会文化的要素等）を中心に質的・量的な比較を行う。

(3) 教科書を含む各国の英語教育事情（現状と課題）を共有するための国際シンポジウム、英語教育、言語学等の最新の知見を共有するためのシンポジウム、公開講演会の開催。

(4) 教科書比較のためのソフトウェアの開発、および、コーパス利用に関連するソフトの利用法のワークショップの開催。

(4) 以上を総合的に扱った報告書の刊行。

4. 研究成果

(1) 構築されたコーパスは日本、韓国、中国、台湾、ベトナムの中等教育で用いられている英語教科書（179冊・総語数3,770,932語）を収録し、Web上での検索、ダウンロードを可能にした。単なる教科書本文を参照するだけでなく、文化情報や、文法の扱い、練習問題など形式に関連する教材開発などのためにはもとの教科書に戻って検討する必要があり、そのためテキストファイルからもとの教科書のPDF版をページ毎に参照するためのリンクを貼った。構築されたコーパスは教科書分析のためだけでなく、教育用コーパス（Pedagogic Corpus）としての利用価値も高い。（詳細は報告書、3-18）

(2) Freq_Analysis_Toolkit（以下FAT）等の分析用ソフトの開発、及び統計パッケージRの利用法とRを用いた多変量解析の方法論の解説：FATは教科書コーパスからダウンロードしたテキストファイルを対象に語彙の頻度表や分割表を作成した上で多変量解析の一手法である分割表の数量化を行い、結果を1次元、2次元、あるいは3次元で表示するプログラムと、文の長さの比較、あるいは情報の密度を測るTTR（Type Token Ratio: 総語数を異語数で割ったもの）の推移や総語数の増加に伴って異語数がどの様に伸びるかを分析、比較するなどの機能を持った一連のプログラムである。FATで作成した分割表を対象に主成分分析、因子分析などの多変量解析も可能になるが、Web上でダウンロード可能なフリーウェアの統計パッケージRを利用したその方法も取り上げた。（報告書、361-431）

(3) コーパスを用いたコロケーション(共起語)分析の手法や、尤度比検定、多変量解析などの統計手法を用いたテキストの類型分析に用いられ手法が教科書の比較分析に有効であることが実証された。下記の論文、、、、などがこれら方法論に関するもので(報告書、49-58, 85-103)、研究協力者の山添孝夫「教科書コーパスから何が見えるか: 高等学校教科書の場合」、中村純作他編『コーパスと英語教育の接点』(松柏社、2008、pp. 151-179、報告書、pp. 105-120に再録)もこれにあたる。

(4) 文化的側面からの教科書データの分析法の開発と応用。下記の論文 、では写真やイラスト図に現れた文化情報を取り上げ、論文 、では教科書に現れた国名、地名等を取りあげ各国教科書の認識地図を作成し比較したもので、各々、比較分析に有効であることが分かった(報告書、38-48, 59-83)。

(5) 我が国の英語教科書と各国の英語教科書との文化的側面、語彙、文法項目などによる比較。上で言及した方法論を取り上げた論文 、、、もこれにあたるが、これら以外にも研究協力者の Y. Miyaura, “Comparative Analysis of the English Textbooks used in Junior High Schools in Japan and Korea: Identification of Distinctive Words,” (報告書、pp. 121-155)、K. Sato, “Cultural Aspect in English Textbooks: A Comparison of Junior High School Textbooks in Japan and Taiwan,” (*On Language and Language Education*, Vol. 2, 2008, pp. 150-170、報告書、pp. 157-174に再録)、C. Hamanaka, “Comparative Analyses of Junior High School English Textbooks in Japan, South Korea, and China: Focusing on the Usage of Comparative Expressions,” (*On Language and Language Education*, Vol. 3, 2010, pp. 3-33、報告書、pp. 175-199に再録)、K. Yamamoto, “Comparative Analyses of the English Textbooks Used in Middle Schools in Japan and South Korea: From the Viewpoint of Future Expressions by Means of *will*,” (*On Language and Language Education*, Vol. 3, 2010, pp. 191-219、報告書、pp. 201-224に再録)、K. Shimomura, “A Comparative Study of the English Textbooks Used During the First Three Years of English Education in Finland and in Japan,” (*On Language and Language Education*, Vol. 3, 2010, pp. 137-167、報告書、pp. 225-248に再録)等がある。

(6) 英語教科書を含む我が国とアジア諸国の英語教育の現状とその問題点の解明: 下記論文では我が国と中国の新しい学習指導要領の比較、対照を行ったが、さらに我が国とアジア諸国の英語教育の現状と課題を検討し我が国が取るべき方向を考えるために国際シンポジウムを2度

にわたり開催した。“Locating the Teaching of English in Japan in Asian Contexts: What We Can Learn from China and Korea”と題したものは、中国を代表して L. Yongjun 氏 (*English Weekly* 副編集長)、韓国から O. Kwon 教授(ソウル国立大学)、我が国を代表して山岡憲史教授(立命館大学)を講師に議論を行った。結果は同タイトルで『立命館言語文化研究』第21巻、2号、pp. 1-58に報告した(報告書、pp. 251-297に再録)。次いで同じタイトルで副題を “What We Can Learn from Vietnam, Malaysia and the Philippines” として行われたシンポジウムではベトナムから Hoang Van Van 教授(ハノイ国立大学)、マレーシアから Saadiyah Darus 教授 (Universiti Kebangsaan Malaysia)、フィリピンから J. Malicsi 教授 (University of Philippine, Dilman) と山岡憲史教授(立命館大学)を講師に議論を行い、『立命館言語文化研究』第22巻、1号に掲載予定で現在印刷中である(報告書、299-343)。

(7) コーパス編纂と著作権にまつわる諸問題の検討: シンポジウム「コーパスにまつわる諸問題から」宮脇正晴教授(立命館大学)に寄稿頂き、平成21年の著作権法改正により、コーパス作成のための情報収集については許されるものの、作成された記録媒体を公衆の用に供されたネットワークに接続することは今後の議論の動向を見る必要が確認された(報告書、353-358)。

(8) すでに上で引用した紙の報告書は完成、Web上でも公開の予定であるが現在は暫定版として下記[その他]ホームページ等の欄のURLにアップ。))

(9) 研究代表者、研究分担者、各々の方法論に基づいた関連する研究とその成果の公刊。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計26件)

中村純作、アジアの英語教科書コーパスから何が見えるか: 地名・国名などに基づいた認識地図の作成、中村純作編『アジアの英語教科書コーパスの構築と相互比較社会・文化的コンテキストと関連させて』平成19年度～平成21年度科学研究費補助金研究成果報告書、査読無、2010、pp. 47-71.

梅咲敦子、教科書コーパスの意義—連語分析を例に—、中村純作編『アジアの英語教科書コーパスの構築と相互比較社会・文化的コンテキストと関連させて』平成19年度～平成21年度科学研究費補助金研究成果報告書、査読無、2010、pp. 37-46.

津熊良政、松田憲、日本の新学習指導要領と中国の課程基準、中村純作編『アジアの英語教科書コーパスの構築と相互比較社会・文化的コンテキストと関連させて』平成19年度～平成21年度科学研究費補助金研究成果報告書、査読無、2010、pp. 21-36.

野澤和典、ベトナム中等教育における英語教科書データ分析：文化的側面から、中村純作編『アジアの英語教科書コーパスの構築と相互比較社会・文化的コンテキストと関連させて』平成19年度～平成21年度科学研究費補助金研究成果報告書、査読無、2010、pp. 37-48.

堀田秀吾、日英語の同族目的語構文の機能構文論的考察、明治大学教養論集、査読有、439号、2009、pp. 72 - 95.

堀田秀吾、中村純作、評議コーパスから見た裁判員と裁判官の差異、明治大学教養論集、査読有、449号、2009、pp. 49 - 62.

中村純作、英語コーパスの現状、国文学解釈と鑑賞、47巻、査読無、2008、pp. 166 - 174.

K. Reeder, R. Berwick & K. Nozawa, "An online intercultural exchange in a postcultural world," in M. Thomas (ed.) *New frontiers in CALL: Negotiating diversity, Selected proceedings of the thirteenth annual JALT CALL SIG conference*, 査読有、2008、pp. 89 - 96

東照二、内と外のコードスイッチング、関西英語教育学会紀要、32号、査読有、2008、pp. 12 - 25.

朝尾幸次郎、映画のセリフを授業に使う、英語教育、(10月増刊号)、第56巻、8号、査読無、2007、pp. 12 - 13.

野澤和典、Moodleを使った多地点間e-learning環境の構築と授業実践：非言語コミュニケーション教育を中心に、立命館高等教育研究、立命館大学高等教育開発・支援センター、第7巻、査読有、2007、pp. 107 - 122.

S. Azuma "Exploring code-switching through psycholinguistic experiments," 立命館大学国際言語文化研究所『言語文化研究』、第19巻、2号、査読有、2007、pp. 213 - 223.

東照二、国民との心理的距離は広がるばかり：言語学者が福田他「人事語録」を丸裸にする、月刊現代、6月号、査読無、2007、pp. 60 - 65.

〔学会発表〕(計43件)

A. Umesaki, "Corpus-based Collocation Studies in English: With Special Reference to Discourse Functions." International Academic Meeting of Phraseology in Japan 2009 (held at Kansai Gakuin Univ. from July 8 to 11)

野澤和典、Moodleを活用したBlended Learningスタイルの英語教育の実践、2009 PCカンファレンス(於 愛媛大学)

K. Nozawa, "Teaching an EFL Class in a Blended Learning Style Using Moodle," JALT CALL 2009 Conference, June 6, 2009 (at Toyo Gakuen University).

堀田秀吾、応用言語学的研究としての司法コミュニケーションの語用論的分析、日本語用論学会、2009年8月26日(於 龍谷大学)

堀田秀吾、コーパスを用いた評議における制度的談話の考察、法と言語学会、2009年12月12日(於 金城学院大学)

S. Hotta, and J. Nakamura, and M. Fujita, "A Corpus Analysis of Linguistic Communication between Lay and Professional Judges in Japan." The International Association of Forensic Linguists' 9th Biennial Conference (at Vrije Universiteit, Amsterdam, on June 9, 2009)

S. Hotta, and J. Nakamura, "A Corpus Study of Lay-Professional Communication in Criminal Courts," Corpus Linguistics Conference 2009 (at University of Liverpool, UK on June 22, 2009)

中村純作、英語コーパスから日本語コーパスへ(ワークショップ)、British Association of Teaching Japanese as a Foreign Language Spring Conference, 2008年3月15日(於 University of Hull)

中村純作、Rを使った多変量解析入門(ワークショップ)、京都外国語大学応用コーパス言語学研究会 2008年2月27日(於京都外国語大学)

梅咲敦子、論文原稿における前置詞の選択—コーパスに基づく誤用分析、2008年度大学英語教育学会関西支部秋季大会、2008年10月12日(於 神戸大学)

A. Umesaki, "The Use of Specialised Corpora in English for Oral Presentations," Kumamoto Univ. International Symposium on Corpora and English Education, Oct. 25, 2008 (at Kumamoto Univ.)

松田憲、アバター・チャットを利用した Immersive Learning の可能性、CIEC第74回

- 研究会報告「多言語 e-learning システムの開発と教育実践」、2008年3月29日（於大学生協杉並会館）
- K. Nozawa, “An Online Intercultural Exchange in a Post-Cultural World: Culture in Japanese and Canadian Universities,” JALT CALL 2008, June 1, 2008 (at Nagoya Univ. of Commerce and Business)
- K. Nozawa, “Does blended learning really work?—Pros and cons of using Moodle as an educational tool—” GloCALL 2008, Nov. 20, 2008 (at Jakarta, Indonesia)
- 野澤和典, e-learningにおける言語コミュニケーション：光と影、日本コミュニケーション学会第37回年次大会パネル2「実践的な言語コミュニケーション」、2007年6月17日（於西南学院大学）
- 堀田秀吾、藤田政博、中村純作、裁判官が裁判員の参加形態・意見形成に影響を与える発言の分析、法と心理学会第9回大会、2008年10月19日（於 南山大学）
- 中村純作、R を使った多変量解析入門（ワークショップ）、立命館大学大学院言語教育情報研究科・国際言語文化研究所主催「月例英語教育講座」2007年12月16日（於立命館大学）
- J. Nakamura, “How does the Computer Look at the Shakespearian Sonnets?—A Quantitative Observation by Means of Quantification of Contingency Table—,” Faculty Seminar of the Department of English, July 13, 2007 (at University of Central England)
- J. Nakamura, “How does the Computer Look at the Shakespearian Sonnets?—A Quantitative Observation by Means of Quantification of Contingency Table—,” ELR Seminar, June 26, 2007 (at Westemere House, University of Birmingham)
- J. Nakamura, “What’s Good and What’s Bad in the BNC?—Cross-Examination of Multivariate Analyses—,” ICAME 2007, May 24, 2008 (at Falcon Hotel, Stratford upon Avon)
- 21 S. Hotta, “A Corpus Analysis of Deliberations in Japanese Trials,” Corpus Linguistics 2007, July 28, 2007 (at University of Birmingham)
- 22 K. Asao, “Freenet and the Internet: A New Look at Computer-Mediated Language Learning,” The Independent Learning Association 2007 Japan Conference, Oct. 7, 2007 (at Kanda University of Foreign Studies)
- 23 梅咲敦子、コーパスを利用した語法研究実践例—身近な問題の解決から—、英語語法文法学会主催第3回英語語法文法セミナー、2007年8月6日（於関西学院大学梅田キャンパス）
- 24 梅咲敦子、英語教育とコーパス：問題解決型学習と自律した英語使用のためのコーパス利用、日本英語コミュニケーション学会第16回大会シンポジウム『英語コーパス活用最前線—現状と今後の展望を考える』、2007年11月24日（於 早稲田大学）
- 25 K. Nozawa, “Autonomy Learning Through an LMS,” JALT CALL 2007 Conference, June 2, 2007 (at Waseda University)
- 〔図書〕（計18件）
- 中村純作編著、平成19年度～平成21年度科学研究費補助金基盤研究B研究成果報告書『アジアの英語教科書コーパスの構築と相互比較：社会・文化的コンテキストと関連させて』、2010、pp. 431.
- J. Nakamura, (Editor-in-chief) *On Language and Language Education, Vol. 3*, Graduate School of Language Education and Information Science, Ritsumeikan University, 2010, pp. 554.
- 東照二『社会言語学入門（改訂版）』研究社出版、2009、pp. 232.
- J. Nakamura, (Editor-in-chief) *On Language and Language Education, Vol. 2*, Graduate School of Language Education and Information Science, Ritsumeikan University, 2009, pp. 438.
- J. Nakamura, “How does the Computer Look at the Shakespearian Sonnets? A Quantitative Observation by Means of Quantification of Contingency Table,” in S. Watanabe, et al., *English Philology and Corpus Linguistics*, Shohaku-sha, 2009, pp. 211–226.
- 中村純作、堀田秀吾（編）『コーパスと英語教育の接点』松柏社、2009、pp. 231.
- A. Umesaki, “Corpus-based Collocation Studies in English: From Lexico-Grammar to Discourse,” in K. Yagi, et al., *Corpus Linguistics and Lexicography: Papers from Phraseology 2009 in Japan*. Kwansai Gakuin University Press, 2009, pp. 57 - 76
- 堀田秀吾『裁判とことばのチカラ：ことばでめぐる裁判員裁判』ひつじ書房、2009、pp. 182.
- 東照二『人を惹きつけることば戦略』研究社出版、2009、pp. 236.

J. Nakamura (Editor-in-chief) *On Language and Language Education, Vol. 1*, Graduate School of Language Education and Information Science, Ritsumeikan University, 2008, pp. 433.

梅咲敦子他（八木克正編著）『新英語学概論』（第2部第六章「コーパス言語学」pp. 119-126 担当）』英宝社、2008、pp. 216.

吉田晴世・松田憲・上村隆一・野澤和典（編著）『ICTを活用した外国語教育』東京電機大学出版局、2008、pp. 263.

K. Nozawa, "Current trends in e-learning and EFL in Japan," in K. Fukui, (ed.) *ESP e-Learning for Global Competency: e-Learning Perspectives in ESP Education*. Tokyo: Universal Academy Press, 2008, pp.17 - 35.

野澤和典、CALL環境の構築と運用の実際、佐伯胖監修、CIEC編『学びとコンピュータハンドブック』東京電機大学出版局、2008、pp. 242 - 245、 pp. 250 - 253

東 照二 『言語学者が政治家を丸裸にする』文芸春秋社、2007、pp. 271.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.lang.li.ritsumeikai.ac.jp/asico/>

<http://www.lang.li.ritsumeikai.ac.jp/asico2/>

<http://www.lang.li.ritsumeikai.ac.jp/asico2/report/>

(版權の関係で UserID と Password が必要)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

中村 純作 (NAKAMURA JUNSAKU)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号：20035695

(2)研究分担者

堀田 秀吾 (HOTTA SYUGO)

明治大学・法学部・准教授

研究者番号：70330088

朝尾 幸次郎 (ASAO KOJIRO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40102462

梅咲 敦子 (UMESAKI ATSUKO)

立命館大学・政策科学部・教授

研究者番号：20269963

松田 憲 (MATSUDA KEN)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00081969

津熊 良政 (TSUKUMA YOSHIMASA)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：50188520

野澤 和典 (NOZAWA KAZUNORI)

立命館大学・情報理工学部・教授

研究者番号：00164690

東 照二 (AZUMA SHOJI)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号：50368023

(4)研究協力者

山添 孝夫 (滋賀県立八幡商業高校教諭)

佐藤 佳奈 (逗子市立逗子中学校教諭)

宮浦 陽子 (大阪市立都島工業高校講師)

山本 香里 (奈良教育大学付属中学校講師)

濱中 千裕 (日本通運 K.K.)

霜村 憲司 (立命館大学大学院言語教育情報研究科 研修生)